

渋江保思想の原点を探る 自由民権運動期を中心に

山本 勉

一 はじめに

森鷗外の『渋江抽斎』から浮かびあがってくる渋江保像は教育者、ジャーナリスト、著述者である。これまでの渋江保研究では藤元直樹の『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』において書誌学的研究が行われているが、渋江保が明治期にどのような活動をしてきたのかその詳細をまとめた研究はこれまでのところみられない。唯一『境 創刊号』の『渋江保伝』の「3 渋江保への視点」において稲田は渋江を自由民権運動に関わった人物として取り上げ問題提起をおこなっているがその実証は皆無である。⁽¹⁾

この点について実証できる資料は渋江の著述書・新聞記事・書簡であるが、渋江が自分の見解を開陳している資料は極めて少ない。現時点で手がかりとできるのは、山路愛山『独立評論』や新聞記事、愛知県豊橋市美術博物館所蔵の書簡である。特に渋江の静岡時代の民権運動を知る上で重要な東海暁鐘新報や暁鐘新報については、静岡県立図書館を始め、静岡県歴史文化情報センター、静岡大学附属図書館、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫等にも問い合わせをしたがその資料は一部を除いてほとんど発見できなかった。

小論においては現時点で発掘した数少ない新聞記事や書簡から書肆博文館で著述活動に入るまでの民権家、渋江保の思想について明らかにする。

二 民権運動に至る以前の渋江保の思想形成

(一) 民権思想形成

民権運動に至る以前の渋江の思想形成についてはよくわかっていない。渋江は10代の頃から欧米の書籍を訳読する中で欧米型の民主的思想に開明してきたのではないかと考えられる。山路愛山『独立評論』再興第九号、澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」には、「福澤諭吉の『西洋事情』の方が面白いから其れを読んで見たまへと言ふたので、種々の手数をかけて態々江戸から其本を取寄せて読んだ。福澤先生の名は既に慶応二三年の頃から聞いて居ったのだが、其著書を読むのは之が最初だったのである。読んで見ると内容は、『西洋見聞録』と多く変らない。ただ其中でひどく感心したのは西洋の国会の組織のことを詳しく書いてあることだった。(中略) 今国会の組織の話を読み、非常に嬉しく思ったのであった。そして福澤先生の処へ行って修業をしたいものだと思って居た。」⁽²⁾とある。『西洋事情』は、福澤諭吉が二度の外遊による見聞をもとに欧米の歴史・政治・社会制度等の海外事情を紹介したもので、幕末から明治初期に多くの人に読まれた書籍で啓蒙的役割を果たしたと言われている。当時の日本にはない政治制度や技術を綴った書物から影響を受けた渋江の心に西洋文明への興味関心と共に民権思想が芽生えたとしても何ら不思議ではない。では、当時のヨーロッパの政治・経済・文化などを網羅した福澤諭吉の『西洋事情』の中で渋江はなぜ国会開設にのみ『独立評論』で取り上げたのか。明治初年、征韓論に破れて下野した板垣退助らは1874年(明治7年)に自由民権運動の発端となった民選議院設立建白書を政府に提出している。渋江が『西洋事情』を読んだのは明治初年で民選議院設立建白書がまだ政府に提出される前である。渋江は大正初期に山路愛山『独立評論』再興第九号を執筆し国会のことに触れている。しかし『西洋事情』の「初編卷之一備考政治」⁽³⁾にお

いて国会のことではなくヨーロッパの各国の政治形態について論じ、イギリスについては立君政治・貴族政治・共和政治の各政体が組み合わされた政治が行われていることを述べ、純粹の共和政治としてアメリカ合衆国を挙げている。明治14年の政変当時、藩閥政治を打破して国会を開設し選挙を行うべきだという社会の風潮が政治的課題でもあった。渋江は『独立評論』に『西洋事情』を読んだことを踏まえ国会のことに力点を置いて執筆したと考えられる。

（二）『米国史』と『英国憲法論』に見る民権思想

渋江は1872年（明治5年）15歳で『米国史』を兄の山田脩とともに万卷楼より刊行している。『米国史』目次によれば『米国史』は巻之一から巻之五下まで翻訳出版されたと思われるが、藤元直樹は『渋江抽斎没後の渋江家と帝国図書館』において実物が確認できるのは三巻四冊のみであり5冊目以降の刊行は中断したものと述べている。⁽⁴⁾『米国史』全体の内容を把握することはできないが、目次に、アメリカ独立戦争・アメリカ歴代大統領・南北戦争等について記載が見られる。⁽⁵⁾巻之五下第五十八章から六十五章において「内乱」との表記で述べられているが、目次に1861年～1865年にかけて勃発した南北戦争の年号が記載されていることから、ここで言う「内乱」は南北戦争を指すものと思われる。また、最終章の第六十六章は「ジョンソン大統領」との記載がある。アンドリュージョンソンはアメリカ17代大統領で南北戦争の戦後処理を行っている。渋江はイギリスの植民地であったアメリカが本国から独立を勝ち取り共和制国家を作り上げ、その後の南北戦争によりアメリカが奴隷制を克服し民主的な国家として成立していく過程を『米国史』の翻訳を通して15歳という若さで理解したことは、その後の渋江の民権思想形成にとって大きな意義があったと思われる。渋江23歳、

1880年（明治13年）に山田要蔵とともに翻訳出版したシェルドン・エイモスの『英国憲法論』は国立国会図書館に所蔵されているが筆者は未見である。同書について『渋江抽斎没後の渋江家と帝国図書館』に「出版された同書の表題紙には「明治十四年七月出版」とあり、小幡篤次郎の序文も「明治十四年七月下澣」と記され、刊行は卒業後となっているが、同書の奥付によれば1880年10月2日に版權免許をうけており、その緒言に「明治十三年八月」とあることから、この翻訳の仕事は、かなり早い時期からすすめられていたようである。」⁽⁶⁾とある。『英国憲法論』の執筆を始めた時期は特定できないが、浜松から東京に戻った時期、つまり国会期成同盟が結成された頃で、各地で私擬憲法草案が作られた時期でもある。『渋江抽斎没後の渋江家と帝国図書館』に「邦題は『英国憲法論』とされているが、取り上げられているのは英国における議会の姿と選挙制度の在り方であり、来るべき帝国議会創設へ向けての検討材料となるべき書物であった。」⁽⁷⁾とある。交詢社『交詢雑誌』「第五十九号」広告欄に『英国憲法論』について「エモス氏原著渋江保、山田要蔵合訳 小幡篤次郎序 英国憲法論 書中ヲ大別ノ総論、帝王、上院、下院ノ四項目トシ皇帝ノ特権、皇帝ト国会トノ関係、上下両院ノ組織特権、撰挙人被撰挙人ノ資格、撰挙ノ方法、代議士ノ職務、建議動議ノ方法、決議、及弾劾法等ヲ詳細ニ論述シタル良書ナリ売捌所書肆丸善、山中市兵衛、慶應義塾出版社、大坂丸善支店、梅原亀七」⁽⁸⁾との記載がある。このことから、渋江は来たるべき国会開設を踏まえ、国会開設運動が高まりを見せていた時期に同書を翻訳出版したと思われる。

三 明治14年の政変と函右日報記事『再度ノ喫驚』

（一）明治14年の政変と函右日報記事『再度ノ喫驚』

渋江は1880年（明治13年）に慶應義塾を卒業し宝飯中学校長

として1881年（明治14年）8月に赴任することになるが、『枕石武田先生五十年に就ての感想』に「行李を整へ家慈を伴ひ同地に向ひて出発した。即にして無事に到着し臆て校長兼教頭の辞令に接した。此れハ八月三十一日の事であつた。」⁽⁹⁾とある。渋江は赴任して間もない1881年（明治14年）10月7日の函右日報に自由民権運動が高揚する中で起こった開拓使官有物払い下げ事件を巡る記事を投稿している。函右日報は1879年（明治12年）6月1日に静岡県下で創刊発行された改進黨系の新聞である。1881年（明治14年）3月に大隈重信が国会開設と憲法制定の意見書を提出し政府内部で対立が深まり、開拓使長官の黒田清隆が同郷の五代友厚に格安で官有物を払い下げる事件、「開拓使官有物払い下げ事件」が明るみになったが、渋江はこの事件について函右日報紙上に取り上げた。伊藤博文はこの事件を收拾すると同時に大隈重信とそのブレーンを政府から追放し国会開設の詔勅を出した、所謂「明治14年の政変」が起こるが、同年には秋田事件、静岡県下の民権運動を弾圧した前島荒川舌禍事件も起こり自由党が結党される。

（二）開拓使官有物払い下げ事件と山本忠礼

渋江は、『再度ノ喫驚』の中で当時北海道開拓使長官であつた黒田清隆に抵抗し連行された山本忠礼について「詰朝郵便配達夫ノ東京二三ノ新聞紙ヲ持来ルアリ床中取テ之ヲ閲スルニ余輩ヲシテ再度ノ喫驚ヲナサシムベキモノアリ何ゾヤ去ル十九日山本忠礼工藤弥兵衛以下八九十名ノ志士ハ函館警察署ニ拘引ノ原因ハ強ヲ拂下ヲ請願セシニアリト云フ余輩ハ此報ヲ得テ再ヒ開拓使処分ノ実説ナルヲ悟リシノミナラズ亦更ニ此専横苛虐ノ処置ニ驚カサルヲ得サルナリ」⁽¹⁰⁾と述べている。山本忠礼とはどんな人物であつたのか、『広報市政はこだて10月号』に「明治14年の熱い夏 開拓使官有物払い下げ事件」と題して山本忠

礼と開拓使官有物払い下げ事件について次のように紹介されている。「山本は市中の商人を糾合して、常備倉と汽船の払い下げを請願することに衆議をまとめ運動を展開したが、開拓使によってすべてが拒否されました。このため山本は、函館に巡幸予定の明治天皇に直訴することを計画するのですが、天皇の函館駐輦は取りやめとなり、従臣のみが函館に宿泊したのです。そこで山本らは、有栖川宮や大隈重信参議らに直訴し、天皇が東京に戻った後、払い下げは中止の決定が下されます。しかしその後、開拓使は報復に出、請願書の文言を盾に官に抵抗するものと決め付け、山本忠礼は禁獄百日、仲間は贖罪金を申し渡されたと結んでいます。」⁽¹¹⁾『函館市デジタル版』によると、函館新聞号外号は「兼て当八月以来区内の一大紛紜を生じたる区民山本忠礼氏外七名の方々には昨二十八日当裁判所にて山本忠礼氏は区民総代の名称を冒用し、名を常備倉払下に仮りて官に抗抵したる者と認定され、右科改定律例第九十九条に依り違制重に問擬し、士族なるを以て閏刑に換へ禁獄百日又、井口兵右衛門、工藤弥兵衛、石田啓蔵、杉野源次郎、枚田藤五郎、小野亀治、林宇三郎の七氏は、右同科輕に問擬し懲役九十日の処情を酌量し贖罪金六円七五錢申付られたり、右当区一般に関し緊急の件たるゆへ、不取敢号外にて其略を報道す。」⁽¹²⁾とこの事件を報じた。

（三）函右日報記事『再度ノ喫驚』の意義

渋江は、山本忠礼が拘引されたことについて『再度ノ喫驚』において「抑モ法律ハ国民ヲシテ普子ク之ヲ知り十分ニ其意ノ在ル所ヲ解セシムルヲ必要トス何トナレバ人民ヲシテ之ニ從テ其方向ヲ定メシムヘキモノタレバ也」⁽¹³⁾と述べ法の必要を説いている。またイギリスの法哲学者ジョン・オースティン（1790年～1859年）とジェレミ・ベンサム（1748～1832）を取り上げ

て次のように述べている。「アウスチン氏言ハズヤ法ハ人ノ所行ヲ画一ナラシムルモノナリト然ルニ政府カ竊カニ法ヲ制シ人民ヲ之ヲ知ラズ之ニ由ルヲ得ザシメ而之ニ違ヘリトテ之ヲ罰セバ是レ人民ヲ率井テ陥穽ニ擠スモノナリ是レ法ハ所行ヲ画一ナラシムルノ功ナク徒ニ人民ヲ苦ムルノ害アルナリ人民ヲシテ法ノ保護ヲ蒙ラズノ惟害之蒙ラシムルナリ」⁽¹⁴⁾、「ベンサム氏曰法ノ用ハ社会ノ安全(シキュリトー)ヲ増シ恐怖(アラーム)ヲ減スルニアリト今人民ヲシテ安全ヲ挙テ之ヲ失ヒ恐怖ノミヲ増サシメバ之ヲ何トカ云ハン」⁽¹⁵⁾ ジョン・オースティンはイギリスの法哲学者でジェレミー・ベンサムの功利主義に大きく影響を受けたと言われている。そのベンサムの功利主義の目標は社会全体の幸福を目指すための政治を行うことであり、黒田清隆が開拓使の事業を五代友厚らに払い下げようとし、それに反対した山本忠礼らが拘引されたことに対して、渋江は反革命勢力一掃のための恐怖政治を行ったフランスの政治家、ロベスピエール(1758～1794)を引き合いに出し、黒田清隆とロベスピエールを重ね合わせ黒田の行った山本忠礼らの連行を批判している。我が国においては、1948年(昭和23年)に基本的人権を保障する日本国憲法に基づき人身保護法が制定されたが、渋江は『再度ノ喫驚』の中で、イギリスで1679年に成立した人身保護のための救済手段として活用された「ヘビアス・コーパス・アクト」を取り上げ『再度ノ喫驚』を次のように結んでいる。「『ヘビアス、コーパス、アクト』ノ精神ノ罪人トナルノミナラズ公衆ノ勲敵トナル如キノ動作アラン余輩ハ故ニ亦其虚説ナルヲ確信シー日モ早ク山本氏等拘引ノ原因ヲ知ラント欲スル耳知ラズ是レ亦無根ノ風説ナルヤ否ヤ開拓使官吏ノ名誉ヲノ赫赫タルヲ夜光ノ珠ノ如ク日月ト光ヲ争ハシメ以テ浮説ノ妖氣ヲ解散スルノ期必ズ近キニ在ラント」⁽¹⁶⁾ 函右日報に掲載された『再度ノ喫驚』は、明治14年の政変が起こった1881年(明治14年)10月12日より1週

間前の10月7日に掲載された。この記事において渋江は法と人民との関わりについて触れ、ジョン・オースティンやジェレミ・ベンサムを挙げて法の重要性を説いている。また、フランスの政治家、ロベスピエールを例に人身保護法であるヘビラス・コーパス・アクトを取り上げている。ヘビラス・コーパス・アクトは17世紀イギリスにおいて人身の自由保護のための救済手段として活用されイギリス立憲制の柱として重要な役割を果たした。渋江が『再度ノ喫驚』において、山本忠礼に多くの紙面を割いて擁護したのはこのヘビラス・コーパス・アクトの原則からであろう。1875年（明治8年）に制定された讒謗律は既に廃止されていた。山本忠礼は請願書の文言を盾に官に抵抗するものと決め付けられ禁獄百日の刑に処せられたが、この点について渋江はヘビラス・コーパス・アクトを取り上げたものと思われる。また立憲改進黨は当時イギリス流の立憲君主制を目指しており、国会開設を目指して民権派の側に立っていた渋江の思想とも合致するものだった。

ベンサム著、E・デュモン編『民事および刑事立法論』のうち林董が翻訳した『刑法論綱』「第21章官吏ノ専横ヲ予防ス」のコマ番号12に「英国人ノ人身保護律ニ似タル法律ヲ創定セシヨリシテ随意ニ人ヲ獄ニ下シ若シクハ禁錮スルノ害ヲ」⁽¹⁷⁾とある。また、ベンサム著、E・デュモン編『民事および刑事立法論』「第三卷刑法典の諸原理 第四部違法行為を防止する間接的諸手段について 第二十一章權威の乱用に対する一般的警戒」に「イギリス人のヘービラス・コーパスという性質の法律〔人身保護法〕は、恣意的權力に対する個人の保護のために制定された。」⁽¹⁸⁾とある。林董訳『刑法論綱』は『再度の喫驚』（函右日報 1881年10月7日）の2年前に翻訳出版されているが、渋江は英書も読みヘビラス・コーパス・アクトについて知り、同時代の誰よりもこの時代のベンサムを相当深く理解していたと思われる。

四 宝飯中学校長時代 渋江の宝飯中学赴任の経緯と民権思想 (一) 渋江の宝飯中学赴任の経緯と民権思想

森鷗外の『渋江抽斎』や山路愛山の『独立評論』第二巻第四号澁江保氏談話「新聞今昔譚（其三）」、『抽斎歿後』に三重日報や明治日報等の官権新聞を断った経緯や自由民権運動との関わりについて記されているが、ここでは愛知県豊川市国府町にある弘法山公園の『武田準平の碑文』の原稿となった『枕石武田先生五十年に就ての感想』について取り上げる。『枕石武田先生五十年に就ての感想』には、「当時少壮なまぎき盛りの私ハ近日の時事を以て悉く非なりとし、集会条例の発行、開拓使官有物の払下、大隈河野等辞職の顛末、日く何、日く何と見るもの聞くもの一として癰癰の種子ならぬハなく、如何せんと考慮しつ、あつたが、又考ふるに諺に淵に臨んで魚を羨むハ退いて網を結ぶに如かずと、なまなか役にも立たぬことに運動して無用の月日を費さんよりハ民立の学校に教鞭を執りて、不羈の精神を鼓舞養成したる力優しならんと心竊かに一決したれば、間も無く招聘に応ずる趣を小幡先生件に報じ、両三日の後、行李を整へ家慈を伴ひ同地に向ひて出発した。」⁽¹⁹⁾とある。渋江が『枕石武田先生五十年に就ての感想』で上げている「集会条例の発行」とは1880年（明治13年）に公布された集会条例のことである。この条例により政談演説会や集会が規制されることになり自由民権運動への弾圧につながった。また「開拓使官有物の払下」や「大隈河野等辞職の顛末」については「二 明治14年の政変と函右日報記事『再度ノ喫驚』」において述べたとおりで、大隈とともに名前が挙がっている河野敏謙は明治14年政変で追放されている。イギリス流の立憲君主制を目指し、早期国会開設を目指していた大隈重信らが政府から追放され、開拓使官有物の払い下げは中止になったものの、伊藤博文らが1890年（明治23年）の国会開設を公約し自由民権運動衰退の要因となった。渋江は当

初民権派の新聞社の主筆として記事を執筆することを望んでいたと思われるが、明治14年の政変を契機に東京を離れ「民立」の学校において時代の担う若人の養成のため教育者として赴任した。

渋江は宝飯中学校において校長兼英語教師として、宝飯中学校の教育のために尽力しているが、宝飯中学校の教育の発展に寄与するかたわら、武田準平と出会い進取社を結党し民権家としても活動している。渋江が武田準平とともに民権家として活動したことを報じた新聞等の資料は今のところ見つかっていないが、『枕石武田先生五十年に就ての感想』⁽²⁰⁾、山路愛山の『独立評論』「新聞今昔譚 政党勃興時代」⁽²¹⁾において政党を結党し活動していたことや政談演説会を行っていた様子が記載されていることから、渋江が民権派に身を置き三河の地においても民権家として活動していたことが伺える。

（二）交詢社回状について

交詢社は1880年（明治13年）に福沢諭吉や小幡篤次郎らによって構想設立され、国会開設運動の高まりの中私擬憲法の交詢社憲法を起草し演説会を行った結社であった。また全国各地に交詢社巡回社員を派遣し地方においても演説会を開催した。以下に示す交詢社回状は交詢社社員、波多野承五郎の豊橋での演説を伝える回状⁽²²⁾である。

交詢社回状 至急御回章申上候、時下寒威慄冽之際各位益御清適嘉言上候

然ハ過日御通知申上置候本社巡回要員波多野承五郎君、今夕刻豊橋駅へ到着候様浜松旅宿ヨリ電報有之ニ付テハ、明十一日午前（十二時）豊橋表ニ於テ懇親会相開キ、本社景況及ヒ社会一般ノ近況等諮問仕度候ニ付、其節ハ是非御出頭被下度、願クハ

今夕ヨリ御来会被来下候様致度、此段至急以便御通知上候、但
シ豊橋社員ハ今夕ヨリ来会談話候積ニ付、是ニモ御繰合可下、
拙者関屋町三輪弘忠氏宅ニ罷在候間、夫迄御枉駕奉願上也
明治十五年十二月十日午後一時 加藤幸三郎 三輪弘忠 渋江保
牛久保村 伊東喜助君

岩瀬長兵衛君 病中に付出頭難致
北金屋村 中尾十郎君 ○○君之出頭 承知致候

この回状は1882年（明治15年）暮れに加藤幸三郎、三輪弘忠、
渋江保の連名で出されている。三輪弘忠（1856～1927）は宝飯
中学校発足当時より渋江と共に助教兼幹事として奉職している。
また宝飯中学校廃校後は校長として宝飯郡第一高等小学校に在
職していたことがある。封書の宛名は「伊藤喜助君」とあるので、
伊藤喜助より順次回状した書簡と思われる。また岩瀬は病気で
出頭できないこと、中尾ともう一人の名前は判読できないがこ
の二人は出頭できる旨が記載されている。この回状によれば波多
野承五郎が豊橋駅に到着するので懇親会を開きたい旨が記載さ
れている。実際に波多野が1882年（明治15年）暮れに豊橋に来た
のかどうか、これを裏付ける資料が『交詢社百年史』にある。

『交詢社百年史』「第三章巡回委員の派遣と支社の設置 各地の
交詢会」によれば、「遠三尾勢地方巡回 明治15・11・29～12・
22 巡回委員 波多野承五郎・渡辺治」⁽²³⁾とある。同書「資料14
巡回委員派遣一覧」には「遠三尾勢地方巡回 巡回委員波多野承
五郎・渡辺治 12・9浜松にて懇親会に出席、12・13豊橋より岡崎
に到着」⁽²⁴⁾とあり、波多野承三郎が巡回委員としてこの時期に
豊橋に立ち寄ったことが伺える。また、差出人の一人の加藤幸
三郎であるが、同書「第四章私擬憲法案と明治十四年の政変
猶興社の「条約改正論」」に猶興社員14名の一人として犬養毅
らとともに「加藤幸三郎」の名前が見られる。⁽²⁵⁾加藤は渋江と

同じ慶應義塾の出身であるので交詢社にも深く関わっていたと思われる。また、交詢社設立には小幡篤次郎や阿部泰蔵等渋江と関係の深い人物が中心的な役割を果たしていた。なお、愛知県豊橋市美術館には、加藤幸三郎宛渋江書簡が6通所蔵されている。渋江が交詢社々員であったという資料は現時点では確認できていないが宝飯中学校長在職中に民権家として活動していたことがこの回状から伺える。

五 東京横浜毎日新聞、東京日日新聞における主権論・普通選挙論争

(一) 明治期の政党における普通選挙論をめぐる政策

明治期の代表的な政党、立憲帝政党・自由党・立憲改進黨のうち、立憲帝政党は東京日日新聞の福地源治郎らによって結成された御用政党であり、君主主権・欽定憲法主義・二院制を特色とした。立憲改進黨、自由党は国会開設を念頭に結成された民権派政党で、立憲改進黨は君民同治・財産制限選挙制・二院制を、自由党はフランスの民権思想の影響を受け主権在民・普通選挙・一院制を特色としていた。渋江が編輯員となった東京横浜毎日新聞は立憲改進黨系であり、東京横浜毎日新聞で主権論を論じた島田三郎は東京横浜毎日新聞の社長になった人物である。1882年（明治15年）の東京横浜毎日新聞において島田は主権論⁽²⁶⁾を論じているが1883年（明治16年）に入り外山正一と渋江は本論から外れた枝葉末節的なベンサム選挙論争を展開した。その論争について以下に述べてみたい。

(二) 東京横浜毎日新聞、東京日日新聞における普通選挙論争『渋江抽斎』その百三にわずか数行ではあるが、主権論・普通選挙論争について森鷗外の記述が見られる。当然ながら渋江が森鷗外に提供した資料『抽斎歿後』⁽²⁷⁾にも同様の内容の記述が

見られる。主権論については1882年（明治15年）東京横浜毎日新聞の1月18日～24日の社説に6回に渡り掲載されているが著名が記されていない。これについて山崎一穎は『鷗外ゆかりの人々』「七 渋江保」において「「抽斎歿後」の先述の記述によれば、保は主権論、普通選挙論に関して主筆の島田三郎に助力をしたと記されている。主権論は無著名である。「社説」欄であることを考えれば、主筆島田三郎の稿であり、資料提供者として保の存在が考えられる。普通選挙論は無著名で掲載は「社説」欄ではない。この論は保の論と思われる。」⁽²⁸⁾と述べているが、渋江の主権論、普通選挙論についての山崎の論評はない。『渋江抽斎』において鷗外が述べたように渋江は果たして普通選挙論者だったのか。鷗外は『抽斎歿後』を引用し渋江は普通選挙論者、外山は制限選挙論者と述べているが、渋江は東京横浜毎日新聞において制限選挙論者であると明白に述べている。東京横浜毎日新聞は1883年（明治16年）1月31日・3月8日・3月9日・3月10日・4月15日・4月18日の6回にわたって普通選挙論・制限選挙論について記事を掲載している。3月8日については、東京日日新聞掲載の『毎日新聞は盲目蛇』という記事をわざわざ東京横浜毎日新聞に再掲している。1883年（明治16年）2月22日の東京日日新聞掲載の記事を見ると「毎日記者の為には甚お気の毒の乍至ベンサム氏は矢張普通選挙論者なりベンサム氏は国会改革の草案を題した論文に於て君主専政と貴族政治との弊害を縷陳し之れを救済なさんものは特り普通選挙法なりと云ひ小兒若くは瘋癲白痴等の如きものを除き一般人民に選挙権を有せしむるも決して危険の事にあらざる旨を実利主義に甚すぎて痛論せられたり毎日記者がベンサム氏は普通選挙論者にあらずと云へるは全くベンサム氏が選挙権を論じたる文杯は少しも読みたることなきも曩に余がベンサム氏は天賦人權を非とする論者なることを証明なしたれば天賦人權を非とする者ならば必ず普通

選挙論者にもあらざるものならんと記者の卓見を以つて推測せられしものか但しはベンサム氏の此等の書は読まれたることあるも文意を解しちがへられたるか」⁽²⁹⁾とあり、外山正一等の東京日日新聞はベンサムを普通選挙論者であると唱えている。それにたいして、渋江は1883年（明治16年）3月10日の東京横浜毎日新聞『ベンサム氏ノ普通選挙論者ニアラザルヲ辨ジテ外山氏ノ杜撰ヲ正シ併セテ日報記者ノ蒙ヲ啓ク』において「予輩ハ制限選挙ヲ主張スル者ナリ教育制限ノ主義ヲ可トスル者ナリ然リト雖専ラ教育制限ニ依頼セントスルベンサム氏ノ考案ニハ未ダ全ク□ミズル能ハザルナリ特ニ我国ノ現状ニ於テハ最モ此間ニ取捨ヲ為サザル可ラズト信ゼリ此等ノ問題ニ至テハ予輩別ニ持スル所ノ考案アリト雖基本題ノ主トスル所ニアラザルヲ以テ今又陳セズ此ニハ唯ベンサム氏ノ制限選挙論者タルノ一点ヲ定ムルヲ以テ足レリトスベシ」⁽³⁰⁾と述べベンサムを制限選挙論者であると述べている。

（三）森鷗外『渋江抽斎』記述の主権論・普通選挙論争の真意

西尾孝司は『ジェレミ・ベンサムの主権国家論』の中でベンサムの『民事および刑事立法論』を以下のように引用している。「われわれはついに、普通選挙制が確立されるべきである。（中略）選挙人としてふさわしいとは考えられない人々とは、政治常識と十分な知識をもっているとは考えられない人々である。われわれは、政治常識の不足ゆえに自分自身を売ろうとする誘惑にかられるような人々や定まった住居をもたない人々や法によって禁止されている一定の犯罪について裁判所の法廷において有罪を宣告されたことのある人々には、政治常識があるなどと考えすることはできない。われわれは、婦人に十分な知識があると考えすることはできない。なぜならば、婦人はその家庭的条件が公務の遂行を不可能にしているからである。また、子供や

一定年令以下の成人、さらにはその貧困ゆえに初等教育をうけたことのない人々に十分な知識があると考えすることはできないのである。」⁽³¹⁾この点について西尾は「ここから読み取れることは、ベンサムは、普通選挙制を主張しながらも、かなり厳しい制限を付しており、それはいわゆる男子普通選挙制にもとうてい及ばないものである。このような選挙制度においては、選挙人はおそらく成人男子のせいぜい二―三〇パーセントにとどまるものと思われるのである。」⁽³²⁾と論じている。渋江は東京横浜毎日新聞においてもベンサムの意見として制限選挙制のことを取り上げている。しかし、西尾によれば、ベンサムは晩年『憲法典』の国家構造改革要求の中に共和制（君主制の廃止）や人民主権と共に男子選挙制⁽³³⁾を取り上げている。渋江はベンサムの『憲法典』の記述を踏まえて、東京横浜毎日新聞、東京日日新聞における普通選挙論争を行った頃とは明らかに異なる「普通選挙論者」の側に立った見解を『拙斎歿後』において述べたと思われる。このため、森鷗外は『渋江拙斎』において「普通選挙論では外山正一が福地に応援して、「毎日記者は盲目蛇におじざるものだ」と言った。これは島田のベンサムを普通選挙論者となしたるは無学のため、ベンサムは実は制限選挙論者だというのであった。そこで保はベンサムの憲法論について、普通選挙を可とする章句を鈔出し、「外山先生は盲目蛇におじざるものだ」という鸚鵡返おうむがえしの報復をした。」⁽³⁴⁾と執筆した。これは渋江が新聞紙上で論争を繰り広げていた1883年（明治16年）当時に比べて、渋江のベンサム理解が晩年ベンサムが『憲法典』を執筆していた頃の段階に到達していたことへの証明となるものである。

六 静岡時代 東海暁鐘新報・暁鐘新報主筆と民権活動

渋江は1885年（明治18年）12月～1890年（明治23年）3月の四

年有余の間、静岡県内に在住し、英語教育者として英語教育の普及と啓蒙を図ると共に東海暁鐘新報や暁鐘新報の記者として自由民権運動の啓蒙家として活躍した。『静岡県教育史通史篇上巻』・『静岡県史資料編十七近現代二』・『静岡県英学史』・『松本亀治郎伝』等の資料により英語教育者としての渋江の様子はある程度知りうる事が出来るが、渋江が民権家としてどのような活動をしたのかこれまでのところよくわかっていない。ここでは数少ない資料から渋江の静岡県内での自由民権運動との関わりを検証したい。

渋江が静岡県に在住した頃の静岡県内の主な新聞は、静岡新聞（静岡大務新聞）・函右日報・東海暁鐘新報・暁鐘新報である。渋江は1887年（明治20年）から1890年（明治23年）にかけて東海暁鐘新報編輯主任、暁鐘新報主筆として才筆を振ったが、明らかに渋江の執筆した社説であるとわかった記事は現時点では極めて少ない。渋江が編輯主任となった東海暁鐘新報の社主は前島豊太郎（1835～1900）で自由民権運動家として1881年（明治14年）東海暁鐘新報を創刊し自由民権思想の普及を図った人物である。渋江と前島豊太郎との関係については『草莽の民権家前島豊太郎伝』によれば「渋江は浜松在住当時からの旧知である。過去に浜松の衛生演説会でともに講演を行った記事がある。」⁽³⁵⁾とあるので、渋江が瞬養学校に勤務していた1877年（明治10年）頃からの関係であろう。前島が指摘している浜松の衛生演説会の記事の所在については静岡県立図書館等で調査したが今のところわかっていない。

（一）見附宿の政談演説会について

渋江の自由民権運動への関わりを如実に物語る資料がある。1886年（明治19年）3月16日付の静岡大務新聞掲載の『見附宿の政談演説会』の記事である。見附宿は東海道の宿場で現静岡県

磐田市見付にあたる。静岡大務新聞には政談演説会について次のように記されている。

同演説会の企わることは略々前日の紙上にも掲載し置きたるが愈々演説も認可せられたれば来る廿一日正午より見附磐田座にて開会する都合なりと云ふ其うち左の四題は不認可となれり

(一) ①二十三年前ニ伊藤総理大臣ノ勤ムベキヲ如何

②日本郵船会社ノ処分如何 渋江保

(二) 帝王ハ神聖ナリ (二題ノ内) 川上熊吉

(三) 自著政府大改革ノ顛末ヲ述ブ 斉藤和太郎

因て斉藤渋江の二氏は更に左の演説に改めたりと

(一) 今日ノ内閣ハ責任内閣に非ズ 斉藤和太郎

(二) 政府更革ノ気運 渋江保

又廿一日演説終れば見附宿近傍の有志者、山田、河野、熊居、斉藤、平野、高塚、藤原、市川、山岡、古澤の諸氏主唱者と為りて同宿井澤屋にて懇親宴会を開く由なり」⁽³⁶⁾

(『見附宿の政談演説会』の記事の通し番号：引用者)

静岡大務新聞の斉藤和太郎の演題「自著政府大改革ノ顛末ヲ述ブ」にある自著とは、1886年(明治19年)3月1日付で出版の届けがあり、同月21日に静岡大務新聞社より出版された『政府大改革之顛末上編』⁽³⁷⁾である。同書目次によれば「第二節十二月廿二日ノ大改革」・「第三節十二月廿二日ノ大改革」⁽³⁸⁾とある。緒言には「今日ノ大事ヲ黙過スルニ忍ビズ世人ト共ニ時政ノ利害如何ヲ視察セント欲シテナリ世人若シ此書ニ頼テ政府更革ノ一班ヲ知了セハ予ノ幸甚シト謂フ可シ明治十九年三月静岡大務新聞社樓ニ於テ斉藤和太郎識」⁽³⁹⁾とある。斉藤は同書にて1885年(明治18年)12月22日太政官達第69号により廃止された太政官制に代わって発足した内閣制度について述べている。伊藤博

文はこれにより初代内閣総理大臣に就任したが、このことを踏まえ斉藤は演説を行ったものと思われる。但し演題は「自著政府大改革ノ顛末ヲ述ブ」が不認可となり「今日ノ内閣ハ責任内閣に非ズ」に改められている。渋江についても当初の演題は不認可となり「政府更革ノ気運」に変更されている。『政府大改革之顛末上編』の目次に「第一節政治活動ノ真理 政府更革ノ気運」⁽⁴⁰⁾とあり明治六年の政変や明治十四年の政変についても触れていることから、斉藤の「自著政府大改革ノ顛末ヲ述ブ」の演題を不認可としたのであろう。渋江の当初の演題は「二十三年前ニ伊藤総理大臣ノ勤ムベキヲ如何」と「日本郵船会社ノ処分如何」である。見附宿の政談演説会の23年前に伊藤博文は長州五傑のひとりとしてヨーロッパに秘密留学した年であるが「二十三年前ニ伊藤総理大臣ノ勤ムベキヲ如何」の演題に込められた渋江の真意は測りかねる。二つ目の「日本郵船会社ノ処分如何」の内容についても現時点でわかっていない。演題にある日本郵船会社は、見附宿の政談演説会の前年の1885（明治18）年に郵便汽船三菱会社と共同運輸会社とが合併し誕生している。

なお、川上熊吉については『静岡県印刷文化史』の「四静岡の新聞史 函右日報」に次のように名前が見られる。「提醒社を脱退した平山陳平、広瀬重雄、酒井民三郎、川上熊吉、榊原正吉、日野清芳等は、参同社を組織し、新聞発行の準備を進め、六月一日、日刊の函右日報を創刊した。」⁽⁴¹⁾このことより、川上熊吉は立憲改進黨系の函右日報創刊時のメンバーのひとりであったことがわかる。

（二）渋江保と東海暁鐘新報・暁鐘新報

渋江と東海暁鐘新報・暁鐘新報との関わりについての資料は極めて少ないが、東海暁鐘新報編輯主任、暁鐘新報主筆として才筆を振るったことが明らかになっている記事から民権家とし

ての渋江の活動を述べてみたい。

1887年（明治20年）2月2日の静岡大務新聞に「東海暁鐘新報編輯主任に聘雇」⁽⁴²⁾とあるので、静岡市に移り住んだ翌年には東海暁鐘新報にて記事を執筆していたことがわかる。同日の新聞によれば2月1日より編輯主任として記事を執筆しているが、2月1日付の東海暁鐘新報は現時点では見つかっていない。1887年

（明治20年）10月22日付静岡大務新聞には東海暁鐘新報から暁鐘新報と名称を変更して主筆の渋江保を招請する記事の掲載があり暁鐘新報第一号は「翌月一日」⁽⁴³⁾となっている。実際には翌1888年（明治21年）1月4日に東海暁鐘新報創刊号が発刊される運びとなるが、創刊号は発見できなかった。この創刊号について渋江は澁江保氏談話「中江兆民居士」の中で、「当時私のやって居た暁鐘新聞は改良後の第一号を出したときであったが、滅多に人を褒めたことのない居士は、何を感じたものか其の新聞を見て、私の書いた論説を非常に褒めて。『これから兄弟分にならう』と言った。」⁽⁴⁴⁾とある。また山路愛山『独立評論』再興第八号の澁江保氏談話「中江兆民居士」に「私は其後静岡の暁鐘新聞主筆に聘せられて同地に趣き、居士は東京に居て、当時後藤伯等のこしらへて居た政談といふ雑誌に筆を執って居たが、絶えず手紙の交換はして居った。居士がルソーの民約論の訳者で、所謂自由民権運動の激励者であったことは今更申す迄もない。随って当時の藩閥政府よりは、居士の如き、最も眼の上の瘤とされて居たもので、明治二十年保安条例発布の際には他の幾多志士と共に皇城三里以外の地に退去を命ぜられた。居士は外に行く可き処もないので、大阪の東雲新聞といふに身を寄せることになり、其の下阪の途次静岡に居た私の処へ立寄った。それは翌二十一年の一月二日であった。」⁽⁴⁵⁾とあるので、暁鐘新報創刊号発行日と澁江保氏談話「中江兆民居士」にある期日が符合する。当時三大事件建白運動が起こっていたが、政

府が保安条例を制定して中江兆民ら民権家を東京から追放し自由民権運動に対する弾圧が行われた時期でもあった。

（三）渋江執筆の社説

渋江執筆の社説で確認できているのは1887年（明治20年）12月20日付『暁鐘新報号外号』⁽⁴⁶⁾と1890年（明治23年）4月11日付『暁鐘新報』である。このうち前者の号外号の社説は三年後に迫った国会開設について簡単に触れた程度である。前年大日本帝国憲法が發布され、後藤象二郎の黒田内閣入閣により大同団結運動は分裂し自由民権運動が衰退していった年でもあり、渋江自身も民権運動について強気の発言は出来なかったのではないと思われる。後者については東京で執筆したものと思われる。社説は『巡査の慰勸』⁽⁴⁷⁾で執筆者名も渋江ではなく幸福散史となっている。渋江が東京へ上京し博文館で執筆活動を開始した頃であるが自由民権運動等政治や社会情勢については触れられていない。

七 おわりに

小論においては新聞記事や書簡をとおして渋江の民権思想について述べてきたが、函右日報記事『再度ノ喫驚』や東京横浜毎日新聞、東京日日新聞の普通選挙論争にみられるように渋江がベンサムの影響を受けてきたことが明らかになった。

自由民権運動は明治14年の政変、大同団結運動を経て衰退し、その後、福沢諭吉が脱亜論を唱え日清戦争遂行を支持する中においても、渋江は明治10年代の民権運動が激化していた当時の思想をその後も貫いた。そしてその思想の根底にあったのがベンサムであった。ベンサムは植民地論において植民地政策を批判しているが⁽⁴⁸⁾、渋江の『万国戦史』執筆の特徴のひとつが列強の植民地征服戦争を取り上げたことである。また『万国戦史』

は戦史物にもかかわらず国際関係や外交史、政治史、伝記までも含んだ戦史となっているが、これらはベンサムやマコーレーら英国立憲主義から影響を受けたものと思われる。

しかし、日本におけるベンサム思想は自由民権運動が衰退し国権主義の伸長とともに途絶えてしまう。⁽⁴⁹⁾そして渋江はこの主義主張のために博文館との間に思想上の対立が起こり、渋江の博文館への貢献度は他の作家と比べても決して劣らないにもかかわらず、坪谷善四郎編の『博文館五十年史』においても冷遇された。⁽⁵⁰⁾

今後は渋江の代表作である『万国戦史』や『万国戦史』を執筆する際の参考文献、戦史の内容吟味を通して渋江思想を明らかにしたい。また中国語に翻訳され魯迅を初め当時の清国からの留学生や清末中国を初め東アジア地域に影響を及ぼした『万国戦史』の意義についても検証したい。

注記

- (1) 稲田雅洋『境 創刊号』（佐々木啓之 1983年9月1日）7頁
- (2) 山路愛山『独立評論』再興第九号の澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」（独立評論社 1913年10月1日）33頁
- (3) 福沢諭吉『福沢諭吉著作集第1巻西洋事情』（慶應義塾出版会 2004年7月10日）14・15頁
- (4) 藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第60号2004年3月）83頁
- (5) 渋江保纂輯 山田脩校正『米国史卷之一』（万卷楼1872年8月）目次
- (6) 藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第60号2004年3月）84頁
- (7) 藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第60号2004年3月）84頁

- (8) 交詢社『交詢雑誌第五十九号』（明治14年9月15日）広告欄
- (9) 山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫 1981年11月3日）253～260頁
- (10) 渋江保『再度の喫驚』（函右日報 1881年10月7日）
- (11) 紺野哲也『市史余話六十九明治14年の熱い夏 開拓使官有物払い下げ事件』（広報市政はこだて10月号1989年3月13日）
- (12) 『函館市史デジタル版第2章開拓使の設置と函館の町政第5節開拓使官有物払下事件と市民運動4肩書調査と市民運動判決』（函館市史デジタル版 2018年2月26日検索）
- (13) 渋江保『再度の喫驚』（函右日報 1881年10月7日）
- (14) 渋江保『再度の喫驚』（函右日報 1881年10月7日）
- (15) 渋江保『再度の喫驚』（函右日報 1881年10月7日）
- (16) 渋江保『再度の喫驚』（函右日報 1881年10月7日）
- (17) ベンサム著、E・デュモン編林董訳『刑法論綱第9巻』（島村利助1879年2月18日）コマ番12
- (18) ベンサム著、E・デュモン編長谷川正安訳『民事および刑事立法論』（勁草書房1998年5月25日）686頁
- (19) 山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫 1981年11月3日）253～260頁
- (20) 山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫1981年11月3日）258～259頁
- (21) 山路愛山『独立評論』第二卷第二号の澁江保氏談話「新聞今昔譚）」（独立評社 1914年2月1日）54頁
- (22) 渋江保『交詢社用 至急回状』（豊橋市美術博物館蔵 1882年12月10日）
- (23) 財団法人交詢社『交詢社百年史』（財団法人交詢社 1983年10月20日）140頁
- (24) 財団法人交詢社『交詢社百年史』（財団法人交詢社 1983年10月20日）535頁

- (25)財団法人交詢社『交詢社百年史』（財団法人交詢社 1983年10月20日）162頁
- (26)山崎一穎『鷗外ゆかりの人々』（教文堂 2009年5月25日）530・531頁
- (27)東京大学の鷗外文庫書入本画像データベース『拙斎歿後』81～84頁
- (28)山崎一穎『鷗外ゆかりの人々』（教文堂 2009年5月25日）531頁
- (29)東京日日新聞『毎日記者は盲目蛇』（東京日日新聞社 1883年2月22日）
- (30)東京横浜毎日新聞『ベンサム氏ノ普通選挙論者ニアラザルヲ辨ジテ外山氏ノ杜撰ヲ正シ併セテ日報記者ノ蒙ヲ啓ク』（東京横浜毎日新聞社 1883年3月10日）
- (31)西尾孝司『ジェレミ・ベンサムの主権国家論 啓蒙専制主義から人民主権論へ』（神奈川大学創立50周年記念論文集 1979年11月10日）71・72頁
- (32)西尾孝司『ジェレミ・ベンサムの主権国家論 啓蒙専制主義から人民主権論へ』（神奈川大学創立50周年記念論文集 1979年11月10日）71・72頁
- (33)西尾孝司『ジェレミ・ベンサムの主権国家論 啓蒙専制主義から人民主権論へ』（神奈川大学創立50周年記念論文集 1979年11月10日）81・82頁
- (34)森鷗外『渋江拙斎』（中公文庫 1988年11月10日）288頁
森鷗外『鷗外歴史文学集第五巻渋江拙斎』（岩波書店 2000年1月14日）321頁
森鷗外『鷗外歴史文学集第五巻渋江拙斎』の注釈は小泉浩一郎が執筆している。同書のその百四の注釈6に「ベンサムを……両者の主張については「歿後」に拠るが、事實は逆で、島田はベンサムを制限選挙論者とし、外山は普通選挙論者と

- する。」とある。小泉の注記の指摘以外で、このことについて糾した例は筆者の知る限りこれまでのところ見られない。
- (35) 前島 頤『草莽の民権家前島豊太郎伝』（三一書房 1987年2月15日）228頁
- (36) 『見附宿の政談演説会』（静岡大務新聞 1886年3月16日）
- (37) 斉藤和太郎『政府大改革之顛末上編』（静岡大務新聞社 1886年3月21日）
- (38) 斉藤和太郎『政府大改革之顛末上編』（静岡大務新聞社 1886年3月21日）目次
- (39) 斉藤和太郎『政府大改革之顛末上編』（静岡大務新聞社 1886年3月21日）緒言
- (40) 斉藤和太郎『政府大改革之顛末上編』（静岡大務新聞社 1886年3月21日）目次
- (41) 静岡県印刷工業組合編纂刊行『静岡県印刷文化史』（1967年11月11日）109頁
- (42) 『浜江東海暁鐘新報編輯主任聘雇』（静岡大務新聞 1887年2月2日）
- (43) 『前島氏の新聞発行の計画』（静岡大務新聞1887年10月22日）
- (44) 山路愛山『独立評論』再興第八号の澁江保氏談話「中江兆民居士」（独立評論社1913年9月1日）40・41頁
- (45) 山路愛山『独立評論』再興第八号の澁江保氏談話「中江兆民居士」（独立評論社1913年9月1日）40頁
- (46) 浜江保『社説 暁鐘新報発刊』（暁鐘新報号外号 1887年12月20日）社説
- (47) 幸福散史『巡查の慇懃』（暁鐘新報 1890年4月11日）社説
- (48) 山田英世『人と思想16ペンサム Century Books』（清水書院 1988年5月10日）152～160頁
- (49) 永井義雄『人類の知的遺産44ペンサム』（講談社1892年7月

10日)352・353頁

(50)山本勉『明治時代の著述者 渋江保の著述活動』（佛教大学大学院紀要文学研究科篇第43号 2015年3月）102頁